

研究開発座談会

理論を、社会を動かす「力」に変える —変革の現在地



人と人とのつながりから新たな価値を創出することを目指し、研究所内には日本文化を感じられる交流の場として茶室を設けています。対話を通じて相互理解を深め、多様な視点を結び付けることで、イノベーションの創出につなげています。

山口 英宏

執行役員
技術本部総合技術研究所長

兒玉 貴裕

総合技術研究所 先端技術研究部
エレクトロニクス第一センター
センター長

大下 浩範

総合技術研究所 先端技術研究部
エレクトロニクス第一センター
副主任

泉 万祐子

総合技術研究所 先端技術研究部
エレクトロニクス第一センター

環境負荷低減と機能価値の同時達成という課題に挑む日本パーカライジンググループ。その「技術的司令塔」として始動したParker Innovation Centerでは、世代を超えた研究者たちが集い、ミクロの理論をマクロな社会実装へと昇華させる挑戦を続けています。2028年の創業100周年に向け、新分野「エレクトロニクス」への挑戦、グローバルな人材育成、そしてAIを活用した生産性向上など、研究者たちがそれぞれの視点から変革の現在地を熱く語り合いました。

新組織の始動と立ちはだかる「事業化の壁」

山口：新総合技術研究所(Parker Innovation Center)が建設され、本格始動してから1年ちょっと経ちました。建物という箱が新しくなって、中で働く人がどう変わっていくか手応えを感じはじめました。それまでどこか少し戸惑いがあったようですが、やっと地に足がついてきて、設計時のコンセプトだった「みんなで共創していこう」という雰囲気がよく動き出したと感じています。研究開発に関しては、今は初期段階のテーマが多いため目に見える成果はこれからですが、今後、必ず形となって現れてくるはずだと信じています。

泉：山口所長がおっしゃったように、新組織が地に足がついてきたことを日々実感しています。若手の視点からお話すると、私は入社1年目から研究所に在籍していますが、大学の研究とここでの研究には決定的な違いがあると感じています。大学だと、研究室単位で取り組む領域が一緒に、そこから細かく派生していく形ですが、企業での研究はターゲットや目的が非常にシビアです。私たちには、大学と違って「工業的に、安定して量産できるか」「コストや使える原料の規制をクリアしているか」という「事業化の壁」が立ちはだかります。入社当初はその壁の高さに圧倒されましたが、Parker Innovation Centerには量産化を見据えた実証設備が整っていますし、経験豊富な先輩方が実践的な知恵を惜しみなく授けてくださいます。



大下：泉さんが直面しているという「事業化の壁」に関して言えば、Parker Innovation Centerが始動したことで、研究のスピード感と視野の広がりが劇的に変わりました。以前であれば、他部署や外部の施設と調整が必要だったケースでも、今ではParker Innovation Centerの所内で一気にディスカッションから評価までを行えます。専門外の先輩や外部機関とも気軽に相談できることに加え、Parker Innovation Centerには量産化を見据えた実証設備も整っており、開発からマクロな社会実装へと展開させる「社会実装へのハードル」を乗り越える後押しをしてくれていると感じます。

壁のない空間が起こす「風土改革」と「オープンイノベーション・グローバル化」

兒玉：今、大下さんからディスカッションや相談がしやすいという話が出ましたが、それを大きく後押ししているのがParker Innovation Centerの空間設計ですね。私が入社した頃の古い研究所はセクションごとにフロアも違いましたが、Parker Innovation Centerは大きなフロアにみんなが

集まっているので、お互いの状況がすぐ分かり、パツと話しかけられます。会議室競争になりがちだった打ち合わせも、フロア内のファミレス席のようなスペースを使って、近くにいる人に声をかけ、その場で10分、20分の会話ができる。この壁のない空間が、組織の風通しを格段に良くしています。



泉：まさに兒玉センター長のおっしゃるとおりで、以前の私は一人で黙々と研究をするタイプだったのですが、環境が変わってからは、他部署の人から「こういう性能を実現するにはどのような成分を選んだらいい?」といった相談を受けることが増えました。それをきっかけにディスカッションが始まり、今までなかった新しい視点や情報を逆にもらう機会が増えています。また行き詰まった時など、さまざまな部署が使う薬品が揃えられた保管庫や図書エリアに行くと、インスピレーションが得られます。

> 「Vision2030」の実現に向けた種まきと刈り取り

大下： 泉さんが経験しているような偶発的なコミュニケーションに加えて、階をまたぐことなく自由に行き来できることで、私は同期同士のコミュニケーションや異分野の交流が自然と増えました。それに、私は昨年まで技術戦略センターにいて、当社の持っている技術をどう新しい分野に適用できるかという可能性を探索していたのですが、今のエレクトロニクス第一センターに移ってからは、外部連携を推進する「Co+Lab（コラボ）」をフル活用しています。大学や外部機関のパートナーと初期段階から一緒に実験を行い、社外の知見やリアルなニーズをダイレクトに取り入れています。山口所長や兒玉センター長に対しても、直接「今、面白いデータが出たので試していいですか」と気軽に提案できる生産性の高さがあります。

兒玉： 大下さんが最前線で実践してくれているように、組織としても私たちが新しい領域に打って出る以上、社内に知見が

ないのなら、外の力を借りてオープンイノベーションを進めていくしかありません。当社が長年蓄積してきた「表面処理」というコア技術をベースにしながら、新しい分野に強い大学や外部機関、そして新しいマーケットのお客さまとのマッチングを模索しています。研究テーマ数でいうと、私たちのセンターだけでも2026年は5件から8件へと増やしています。

大下： そうやって兒玉センター長が推進する「外に打って出る」という点では、私は以前、中国の技術センター（PST）に2年間赴任させていただき、そこでの経験は今でも強い自信になっています。中国の研究現場はとにかくスピード感が違い、「明日までに出不なくてはいけない」という中でお客さまに粘り強く対応する姿勢がありました。研究所の中だけに留まらず、こうした「現場視点」を持つことが重要だと学びました。

人的資本への投資と組織の底上げ

山口： 大下さんが中国で学んだという「現場視点」は本当にそのとおりで、お客さまの現場に行き行って状態を見て、「こうして、ああして」と的確に指示が出せるような「現場力」は重要です。だからこそ人的資本への投資、現場力を育むための組織的支援に力を入れています。一例ですが、3年目の若手研究員が現在、中国の技術センター（PST）に1ヶ月間派遣されて、現地スタッフと共同開発をしています。海外派遣に関しては、「自分で行きたい」と手を挙げた人に行ってもらう「公募制」を取り入れます。研究開発で一番大事なのは、興味やモチベーション、楽しむ気持ちですから。ただ、若手をいきなり海外の現場に送ると本人も現地も負担が大きいのので、最初の1週間は現地の文化や技術を知っている中堅・シニアが同行して研修のハードルを下げる「有識者同行制度」も新設しました。



組織がしっかりバックアップするので、安心して挑戦してほしい、という空気を作りたいです。

兒玉： 山口所長が推進されているそうした手厚い支援やグローバルな人材交流は、若手にとっては刺激になり、研究室全体の底上げとモチベーションの向上につながっています。それに加えて、DXやAIの活用も進んでいて、今では生成AIを活用することで、昔なら1週間かかっていた特許や論文の検索結果が、今では数秒で提示される。昔はアイデアが枯渇して頭がカラカラになるまで絞り出していましたが、ただ、AIが出してきた綺麗な答えに頼りすぎると、研究者としての見極める力が育たなくなります。情報が溢れているからこそ、それをどう自分の業務に生かすかという、一歩進んだ力が求められています。

大下： 兒玉センター長のAI活用のお話にもつながりますが、デスクワークが効率化された分、何かを生み出すための時間は増えています。追加の実験装置を導入したいときも、上司への相談のハードルが低く、または経営層への相談のハードルも低く、経営陣も毎年約27億円の研究開発費を「未来への投資」として削らずに守ってくれている。これだけ挑戦を歓迎してくれる環境があれば、若手にとっては自分の技術を試すチャンスが増える一方、成果を出さねばと責任も感じます。

研究者の誇りと、未来の仲間へ

泉： 大下さんが言う「挑戦を歓迎し、未来への投資を守ってくれる環境」があるからこそ、私はまだ自分が開発した技術や製品が世に出た経験がないため、「自分の技術を製品化して、世界の市場で使ってもらうこと」が一番の目標です。日々の研究の9割は失敗や上手くいかないことの連続ですが、だからこそ何か新しい発見ができたときのゾクゾクするような感覚が癖になって、これまで続けてきました。これから社会に出る就活生の皆さんの中にも、モノづくりや開発への「好き」という気持ちがある方には、その気持ちを絶対に曲げずに貫いてほしいですし、Parker Innovation Centerにはその「好き」を極められる素晴らしい環境があります。

大下： 泉さんのような「新しい発見へのワクワク感」に応えられる基盤として、当社のスローガンは「あらゆる表面をカガクで変える」です。そのため、自動車、鉄鋼、エレクトロニクスなど、ありとあらゆる業界と接点を持っています。モノの成り立ちや裏側の技術に深く関わることができ、知的好奇心を刺激されてワクワクする機会が多い会社です。色々なバックグラウンドを持った、好奇心旺盛な熱い仲間たちにどんどん挑戦してほしいですね。

兒玉： 大下さんが言う「好奇心旺盛な仲間」がのびのびと活躍できるのは、当社には、和やかで話しやすい風土があるからです。上の人間も「まずはやってみなよ」と背中を押してく



れるポジティブな空気がある。AIや自動化が進む時代だからこそ、最後は「人と人がどうコミュニケーションを大切にしている仕事をするか」に尽きると考えています。2028年の創業100周年に向けて、特に私たちのエレクトロニクス領域でブレイクスルーを狙っていますので、未来に飛び込んでいける仲間を大歓迎します。

山口： 今日、皆さんの話を伺っていて、諸先輩方から受け継いできた資産に甘んじることなく、こうして新しい研究所でミッションを共有し、開発に熱中する皆さんの力強い言葉を聞いて、頼もしい限りです。ミクロな技術・理論をマクロな社会実装へと昇華させ、世界を変える力に変えていくのは、他でもない皆さんの誇りと情熱です。失敗を恐れず、面白いものを一緒に作っていきましょう。

